


近世の対外政策	()組	氏
	()番	名

一郎君たちのクラスでは、身近な地域の歴史から近世の歴史を振り返ることになり、一郎君は、西都市にゆかりのある「伊東マンショ」を手がかりに近世の対外政策をまとめていこうと考え、次のようなレポートを作成していきました。

【資料1 一郎君の作成したレポート（前半）】

<p>伊東マンショに関する主なできごと [→自分の考え]</p> <p>1549年 (①) がキリスト教を日本に伝える [→この人物の伝導によりキリスト教が各地に広まった]</p> <p>1569年 日向国の都於郡<small>（西都市）</small>に生まれる</p> <p>1577年 島津氏との戦いに敗れ豊後<small>（大分）</small>に逃れる [→マンショがキリスト教と関わるきっかけとなった]</p> <p>1580年 有馬<small>（長崎県）</small>のセミナリオ<small>（神学校）</small>に入校する</p> <p>1582年 天正遣欧少年使節として長崎からヨーロッパへ出発 ※マンショを含む4人の少年は、②3人のキリシタン大名の名代であった [→キリスト教を通して、外国と日本との橋渡しをしたいと考えていたのではないか]</p> <p>1585年 ローマ教皇グレゴリオ13世<small>（謁見）</small>に謁見<small>（*謁見…目上の人に会うこと）</small>する</p> <p>1590年 日本へ戻ってくる<small>（長崎に帰着）</small></p> <p>1591年 京都の聚楽第で、豊臣秀吉に謁見する ※ただし、③キリシタンではなく「インド副王の使節の一員」として謁見している [→帰国前の出来事「（あ）こと」により（ い ）ではないか]</p> <p>1611年 飩肥<small>（日南市）</small>に帰郷する</p> <p>1612年 長崎の教会で亡くなる<small>（43歳）</small> （伊東マンショその生涯）鉦脈社より作成</p>	 <p style="writing-mode: vertical-rl; font-weight: bold;">【都於郡城跡にある銅像】</p>
---	---

(1) 資料1の (①) に適する人物名を答えなさい。

人物名 (フランシスコ) ザビエル

(2) 資料1の

このルートが西日本であることや、地図中には新潟県が含まれていないことなどから判断できます。

【資料2 (1)の人物の伝導路】



- ア 大友宗麟（大分県）
- イ 有馬晴信（長崎県）
- ウ 大村純忠（長崎県）
- エ 上杉謙信（新潟県）

記号
エ

(3) 資料1の下線部③に対する一郎君の考えとして、(あ)に最も適する出来事を下のア～エから1つ選び、下線部③のような行動をとった理由を(い)に書きなさい。

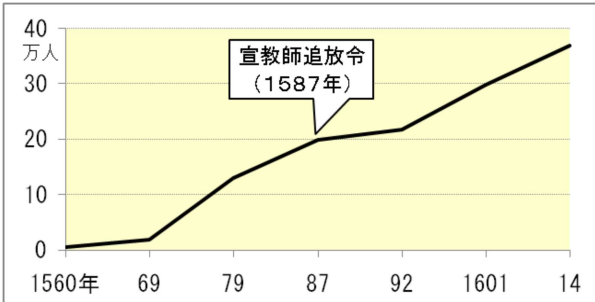
(あ) エ	(い) （帰国する前に宣教師追放令が出されたため、） キリシタンの立場で謁見することができなかったから
----------	---

- ア 織田信長が本能寺の変で殺された（1582年）
- イ スペインの商船が長崎県の平戸に來航した（1582年）
- ウ 豊臣秀吉が九州を平定した（1587年）
- エ 豊臣秀吉が宣教師追放令を出した（1587年）

マンショたちが海外にいてる間に、キリスト教に対する政策が転換しました。

【資料3 一郎君の作成したレポート（後半）】

【資料3-① キリスト教信者数の推移】



(「日本キリスト教史」五野井隆史)

疑問に思ったこと

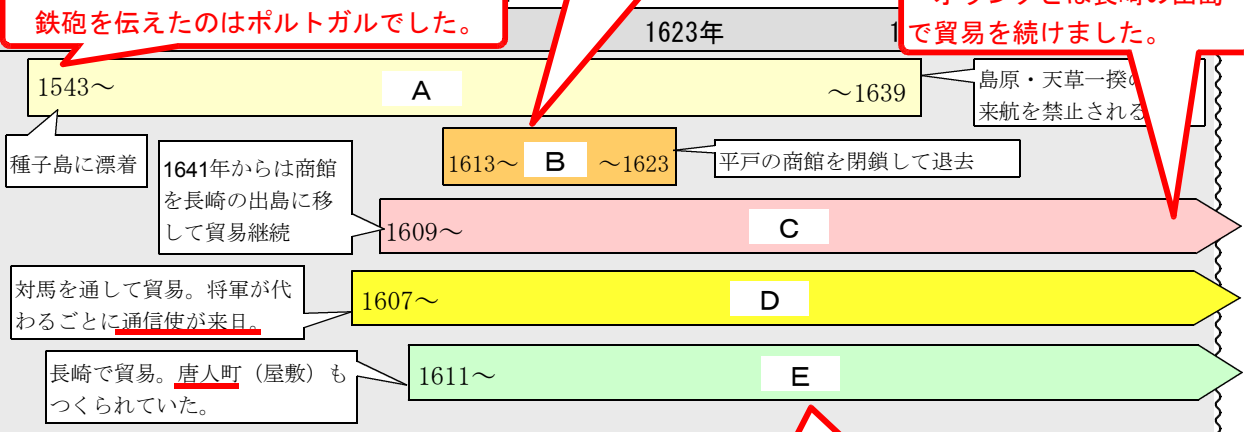
宣教師追放令を出した後も、なぜ信者の数が増え続けているのだろうか？

【仮説】

資料4から、 のではないかと考えられる。

イギリスとの貿易は短い期間でした。

【資料3-② 外国との貿易の状況】



(4) 上の資料3中のに一郎君がどのように読み取れる内容をふまえて書きなさい。

海外との貿易は、為政者にとって大きな利益をもたらすものでした。

(キリスト教の布教は禁止しているものの)ポルトガルとの貿易は認めていたため、ポルトガル人などが信仰するキリスト教を完全に禁止することができなかった

【資料4 宣教師追放令】

- 一 日本は神々の国であるため、キリスト教の国から宣教師たちが邪教(キリスト教)の教えを説くために日本に来ることは、大変悪いことである。
- 一 彼らは日本の領国に来て日本人をキリスト教に改宗させ、神々や仏たちの寺院を破壊しており、このようなことはいまだかつて見聞したことのないことである…
- 一 …これは悪しきことなので、余は(秀吉は)宣教師たちが日本にいるべきでないとする。このため、今日から20日以内に自国に戻るべきである。…
- 一 ポルトガルの商船は、貿易のために来ているのであるから、宣教師追放とはまったく別のことであり、今後も取引は支障なく行うことができる。 (以下省略)

(「日本キリスト教史」五野井隆史より作成 ※訳文を要約)

(5) 上の資料3-②のA～Eには、下の語群のいずれかの国があてはまります。A～Eにあてはまる国を、それぞれ答えなさい。

語群 [イギリス オランダ ポルトガル 朝鮮 明]

A	ポルトガル	B	イギリス	C	オランダ	D	朝鮮	E	明
---	-------	---	------	---	------	---	----	---	---